

第4回（2019年度）日本アレルギー学会男女共同参画奨励賞 受賞報告

日々の臨床と働き方—JSA への期待—



猪熊茂子

医療法人誠馨会千葉中央メディカルセンター
アレルギー性疾患リウマチ科
国立国際医療研究センター国府台病院
リウマチ・膠原病科

日本アレルギー学会は発足 68 年、大きな団体で多臨床科および基礎医学部門から成ります。求められる中核の機能は、高い科学的知見を成す、発信することです。学問はそれ自体自由に自律的に進むもので、必ずしも実学でないところも重要です。近年では、科学的手法は洗練され、Global に共通となってきました。

ヒトは生存のため、したい事をするため、知りたいために仕事をします。それは誰にとっても実現させたい Global なことですが、上記科学的手法を含め Global に是とされるかたちで行った方が有効で持続可能と認識されるに至っています。一方、社会からの特に経済的需要達成、政治的安定構築のために Diversity がキーワードとなっています。働き方改革も、その線に沿って登場です。性差、人種差などによる働き方の違いを Diversity に合わないとして解消する手法の一つが Quarter 制で、現状分析・評価についても Quarter 数値が用いられます。しかし科学の分野なら、其処自体での成果が評価されるのが本来です。

日本は、人口は減少、高齢人口は増大、医師数は微増、医療費は増大で、高齢者医療費抑制は喫緊でも、働き方についての年齢差の検討は端緒についたところですが、点数で誘導される保険診療では、高齢医療従事者雇用は一般職種と同様補完的あるいは福祉的と捉えられ、経験も陳腐化するとされるかも知れません。如何でしょうか。

臨床医学も科学で、その普遍化は学術誌を以てされるのが Global ですが、近年は多数例の疫学的検討結果の掲載が主流で、症例報告は限定的です。しかし症例こそが真実であり、臨床医であれば一例からそれを診てとる、3 例の共通所見はより多数例での検証を待つ。症例研究と疫学は両輪、基礎研究を得て三輪車です。そこでは、年齢を含め研究者の Diversity は正の効果を及ぼすはずですが、社会からの要求とも、それと独立した人間本来の希求にも対応できます。これを進めるのは学会です。構成員、役職、研究費、賞、研究内容誘導などで、更なる Diversity の進捗を期します。

